

特集 飛島発 「元気！」

飛島の活性化のためにさまざまな活動をしている人々がいます。

今回の特集は、そんな人々にスポットを当て、活動の内容や島への思いなどを紹介します。

梅雨が明ければいよいよ夏本番です。その素敵な笑顔に出会いに、飛島に出掛けてみませんか。

●お問い合わせ／とびしま総合センター ☎95-2001
市まちづくり推進課市民交流推進室 ☎26-5612

酒田港から北西39キロメートルの沖合に浮かぶ飛島。外周約10.2キロメートル、面積約2.7平方キロメートル、人口約230人の小さな島で、山形県唯一の離島です。周囲を対馬海流が流れているため、山形県最北に位置しているにもかかわらず、1年の平均気温は12度以上と高く、積雪も10センチを超えることは稀です。





渋谷 聡さん(左)、三浦 慎平さん(中央)、渋谷 わかさん(右)

合同会社 和楽

高齢者の自立支援のために

飛鳥で暮らす高齢者の元気のた
めに、働く人たちがいます。

とびしま総合センターを拠点と
して各種介護サービスを行う合同
会社 和楽。代表の渋谷聡さんは、
6年前に飛鳥に渡り、介護事業所
を立ち上げました。

「飛鳥に来る前は他人事でしたが、

実際に暮らしてみても、島の抱える
人口減少や高齢化などの問題は、
市全体で考えなければならぬこ
とだと実感しました」と語る聡さ
ん。

「介護サービスが受けられなかつ
たときは、歳を重ねて生活できな
くなると、島を離れなければなり
ませんでした。どう生活するか、
島に残るという選択肢があること
が大切なんです」人懐っこい笑顔
を見せながらも、熱く語る渋谷さ
ん。島に暮らす高齢者への強い思
いが垣間見えます。

渋谷わかさんは、生活や仕事、
子どものことなど、さまざまな問
題はあったものの、飛鳥への移住
を決断。夫である聡さんと共に、
島の高齢者の元気を支えています。
「島に住み、島の人と人間関係が
できたからこそ、見えてきたもの
があります。元気に見えても生活
で困っていることがあるんだと」

和楽では、高齢者の自立を支援
するためのサービスとして、定期
船で運ばれてくる荷物を宅配して
いて、そのとき交わすあいさつが
安否確認にもつながっています。

「島のお年寄りが元気なのは、や
りがいや生きがいがあるから。動
けるうちはみんな現役でいたい。

それをフォローするのが私たちの
役割だと思っています」

人として頼られるということ

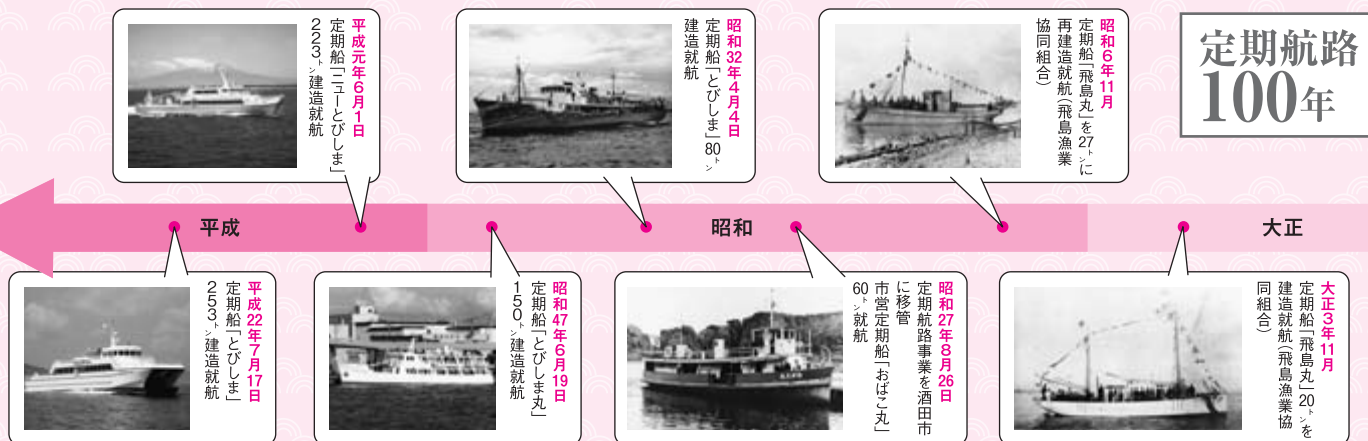
和楽のスタッフとして働く三浦
慎平さん。祖母の介護を通して介
護に関心を持ったときに、飛鳥に
介護事業所があること、さらに求
人情報があることを知り申し込ん
だそうです。

飛鳥には行ったことがなかった
のですが、不安はなく、楽しみ
にしていたと振り返ります。

「通常、介護サービスを提供する
・利用するとなると、介護サー
ビスだけのつながりになる。でも
飛鳥では、介護サービスを提供す
るだけでなく、人として頼っても
られます。それが自分の力になる
し、やりがいを感じます。今は資
格の有無などでできないことも多
く、まだま
だ勉強段階。
もっとスキ
ルアップし
て、利用者
の方から頼
られる人に
なりたくて
す」



定期航路 100年





カフェビヨンド代表
藤橋 潤也さん

飛島にないものを
青森県の米軍三沢基地のレストランでコックをしていた藤橋さん。退職後、海に関わる場所に住みたいと各地を回っていたところ、偶然報道で飛島を知ったそうです。何度か飛島を訪れ、その魅力にひかれた藤橋さん。島の人の「店を出してみてもいいよ」の言葉に背中を押され、移住と開業を決意。7月初旬のオープンに向け、準備は大詰めを迎えています。「飛島といえば海産物で、旅館や民宿の料理も魚介類がほとんど。そこで、島の料理と競合しないものを、手ごろな値段で提供します」



岩木 靖彦さん(左)と
小栗 由香さん(右)

カフェビヨンド

藤橋さんのお店「カフェビヨンド」では、ハンバーガーやホットドッグ、タコライスなどを、移動販売車を使い、夏場の海水浴場などで観光客向けに販売する予定。将来的には店舗を構えたいと、藤橋さんは考えています。

店のスタッフとして、飛島に渡った岩木さんと小栗さん。以前は青森市で「シアタービヨンド」というお店を営んでいたそうです。「代表が『ビヨンドの名前は自分が預かる』と言ってくれたのがうれしかった」と語る岩木さんは、調理と販売を担当。一方の小栗さんは「私は笑顔担当です」と文字通り笑顔で語ってくれました。

飛島に暮らす人のために

3人が飛島に渡ってから現在まで、住まいや店の準備で、さまざまなお世話になったとのこと。「飛島は暮らしやすい場所。不便な点も、少しの苦労で何とかかなります。島の皆さん全員と仲良くなつて、飛島のために役に立ちたいです」と岩木さん。

飛島のためにという気持ちは藤橋さんも同じです。

「飛島には昼食を食べられる場所が決まらず多くはないのが現状です。冬の間も営業を続け、飛島の観光

のために頑張りたい」と語る優しい笑顔が印象的でした。

山形県漁業協同組合飛島支所

飛島の漁業をサポート



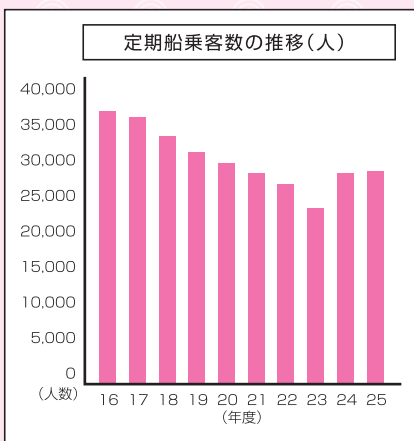
鈴木 紳之介さん

山形県
漁業協同
組合に就
職し、祖
父が飛島
に在るこ

ともあり、飛島支所勤務の声が掛かった鈴木さん。今は祖父の家に住みながら漁協の仕事をしています。

現在は島の漁師さんからの荷受けの仕事が中心。法木地区など距離のあるところには、出向いて荷受けをするそうです。

「今年で3年目になります。島に来た頃は不便さを感じることもありましたが、今は島の若い世代の人たちと交流が深まり、みんなが集まってお酒を酌み交わすのが楽しいです」と笑顔で語ってくれました。



飛島に親戚がいて、幼い頃から島に来ていました。ゆつたりと過ぎる時間が好きです。

この仕事に就いてから、初めて飛島に渡りました。飛島はやっぱり自然が一番です。

定期航路事業所飛島連絡所
渋谷 勇多さん(左) 大澤 光一さん(右)





今あるもので新たなものを



合同会社とびしま代表
本間 当さん

生まれ育った飛島でカフェが商店をやりたいと考えていたときに、仲間と出会い会社を設立しました。

島でしか消費されていなかったものを加工して、商品を作っていこうと思っています。トビウオの卵や、規格外の海産物を加工し、今までであったもので新たなものを作っていきたいです。そしてこの夏、合同会社とびしまでは「秘策」を考えています。今後に期待してください。



飛島の観光窓口

今年で「しまかへ」オープン3年目。島の旬の食材を取り入れたメニューづくりを心がけています。飛島の魅力的な食材のおいしさを、たくさんの人に伝えていきたいですね。

しまかへは島の玄関口に位置しているの、交流拠点になることを目指しています。また島を訪れた人だけでなく、島の人たちにも今以上に利用していただけるように、つながりを強くしていきたいです。



しまかへ店長
渡部 陽子さん



島のみんなを元気に



緑のふるさと協力隊員
五十嵐 麟太郎さん

仕事に慣れ始め、生活のリズムができてきました。主に午前中に漁師を手伝い、午後は島の人のお手伝いや、加工所の作業をしています。

島では元気がある人とない人の差があるように見えます。自分が積極的に関わって、島の人みんなを元気にしていきたいです。

◆五十嵐さんには「さかたの風」でも話を伺っています。本紙26ページをご覧ください。

島に暮らす若者たち

ある人はその魅力にひかれ、またある人は希望を感じて。今、飛島には若者が集い、暮らしています。そんな彼らに「カフェスペース しまかへ」へ集まってもらい、その思いを語ってもらいました。



飛島をデザインしたい

現在は合同会社とびしまの社員としての活動と、飛島コンシェルジュを小川さんと2人でやっています。

1人で活動していたときは何でも屋になってしまうことが多かったのですが、みんなと集まるようになって分担できるようになり、得意分野を生かせるようになりました。

今後は、飛島を舞台にしたプロジェクトなどがあれば、そのデザインを手掛けたいです。



デザイナー
元緑のふるさと協力隊員
松本 友哉さん



飛島の魅力を発信



島のミュージアムにま館長
小川 ひかりさん

島の歴史を展示しているミュージアム潤の運営と、飛島コンシェルジュとして環境教育ツアーのガイドの活動をしています。

今後はミュージアムをさらに魅力ある観光拠点の一つにしたいです。ここから飛島の歴史や素晴らしさを発信していければと思っています。

島の人に手伝えることが楽しいし、その後に「ありがとう」という言葉を掛けられるとうれしいです。



飛島ならではの農業を

飛島には今年4月に住み始めました。東北公益文科大学にいたときに松本さんに声を掛けてもらい、卒業後、飛島に行くことを決めました。

島全体でいろいろな作業をしていますが、農業、しまかへ、加工所が主な活動場所です。

今後はごどいもと天保そばの栽培に取り組みたいです。天保そばは栽培が難しいですが、島で栽培されてきた歴史もあるので挑戦します。



農業Iターン就職
遠藤 元一さん

カフェスペース しまかへ／飛島の玄関口である勝浦港のほど近くに位置する小さなカフェ。飛島の食材を取り入れたメニューを、観光客や島の住民に提供している。名称の由来は、島の人たちがカフェを「かへ」と発音することから。



人気メニューの
イカスミブラックカレー

